

特別
寄稿

読むよろこび、 書く楽しさ

明星大学人文学部教授（日本児童文学専攻）

宮川 健郎

教師や大人は、子どもたちに、しばしば本を読みなさいと言う。しかし、本を読むことには、どんな意味があるのだろう。図書館や書店の児童書コーナーで行き会う、学齢前後の幼い子どもとその親の会話を聞いていると、親は本を読むと文字がおぼえられると思っているのではないかと疑うようなことばが耳にとびこんでくることがある。本を読むことは、文字をおぼえるためでも、国語の勉強のためでもないことは言うまでもない。それなら、本を読むことには、いったい、どんな意味があるのか。よく考えてみることにした。



想像の世界のとびら

まず第一に考えたのは、本を読むことは、自分自身を解放するということ。

私たちは、社会の中で生きている。もちろん、小学生や中学生だってそうだ。社会のさまざまなルールの中で、いろいろな縛りをうけて生きている。けれども本を読むことは、この現実社会の中で生きている自分とはちがう自分を作るきっかけを与えてくれると思う。文学を例にあげるのが、わかりやすい。たとえば、谷川俊太郎に「みみをすます」（『みみをすます』福音館書店、1982年所収）という詩がある。ひらがなばかりで書かれた長篇の詩だが、はじめの4行がひとまとまりの聯になっている。

みみをすます
きのうの
あまだれに
みみをすます

書き出しは、「みみをすます」。……いま、この文章を書いている部屋の窓の外で車が走る音が遠く聞こえる。それから、部屋のエアコンの音。いきなり、「みみをすます」ということばを突きつけられて、耳をすましてみると、いま、ここでは、そんな昔が聞こえてくる。

でも、2行めは、「きのうの」だ。えーっと、きのうは……。いま、ここで、耳をすましていたのに、「きのうの」といわれて、私のからだは、急に、きのうへと引っ張られる。

そして、「あまだれに」。きのう、雨、降ったか

なあ。東京は、寒いけれど、よく晴れていた。すると、これは、実際のきのうのことではないのだと思う。私たちはもう、いま、ここは別の世界へ入りはじめています。

そして、4行め、「みみをすます」。これは、1行めの「みみをすます」とはちがう場所（想像の世界）で「みみをすます」ことになる。

1行めの「みみをすます」が現実の世界に接しているとすると、4行めの「みみをすます」は、自分自身の想像の世界のとびらを開くものになる。文学が、現実を生きる自分とはちがう自分を作るきっかけを与えてくれるというのは、たとえば、こういうことだ。

詩は、1行あけて、さらに「みみをすます／いつから／つづいてきたともしれぬ／ひとびとの／あしおとに／みみをすます」とつづいていくことになる。

（詩「みみをすます」の解釈は、演出家の竹内敏晴さんのそれに従っている。竹内敏晴『ことばとからだの戦後史』ちくま学芸文庫1997年所収の「こえによって「よむ」ということ（一）」参照。）

ナンセンス、仮説の文 **学**

もっとわかりやすいのは、「ナンセンス文学」。これは、ことばの約束ごと（ことばという約束と言ったほうがいいだろうか）をあえて崩した文学だが、日常というのは、ことばによる約束でほとんど全部うごいているように思う。「あす、3時に駅前でお会い」と言ったら、相手にも同じ意味で理解されることで、世の中の秩序は守られている。つまり、ことばのルールが現実の世の中を支配していると思うのだが、意識して、ことばのルールの外に出してしまうのが「ナンセンス」だ。

やはり、谷川俊太郎に「いるか」という詩がある。ナンセンス詩と言っていい作品だ。『ことばあそびうた』（福音館書店、1973年）という詩集におさめられている。

いるかいるか
いないかいるか
.....



全国読書作文コンクールで審査する宮川氏（左端）と詩人・長田弘氏（左から二人目）、映画評論家・佐藤忠男氏（左から三人目）

これも、すべて、ひらがなで書かれているから、意味のとり方でいろいろな読み方ができる。ひらがなの「いるか」は、動物の「イルカ」なのか、そこに居る、居ないの「居るか」なのか。最初の一行だけでも、「イルカ、居るか?」「居るか?イルカ」「イルカ、イルカ」「居るか?居るか?」の4通りの読み方が考えられる。鍋で「炒る」や、弓で「射る」だって考えられるかもしれない。という話を以前していたら、「先生、これは蘇我入鹿ですよ」と言った女子学生がいた。

意味をとりながら読んでいくのだけれど、そのうちに、だんだん意味はどうでもよくなってくる。読み調子のよさに流されて、意味からはぐれていく経験をする。日常生活では決して意味からはぐれるわけにはいかないけれども、あえて、ことばの約束の外に出してしまうことで、現実とべったり接触している自分ではない自分に気づくことができるのではないか。「ナンセンス文学」は、そういう力をはっきりと持っている。

1990年代後半ごろから、中学生向きのおもしろい創作が出てきている。森絵都の『カラフル』（理論社、1998年）や香月日輪の『妖怪アパートの幽雅な日常』シリーズ（講談社、2003年～）、笹生陽子の『楽園のつくりかた』（講談社、2002年）など、「現実が、もし、こうだったら」といった、ある種の「仮説」をふくむ作品が多い。つまり、「ナンセンス文学」と同じように、「もしも」の世界から現実を見直す視点を与えてくれる。

たとえば、『カラフル』は、一度死んだ男の子が天国で抽選にあたって、もう一度他人の身体にホームステイすることになるという、生き直しゲームみたいな作品だ。現実にはありえない極端な設定だが、生き直すチャンスを得て、ちがう視点から見たときに、それまで色あせていた世界が極彩色のカラフルに見える……。

違和感の効用

飯田蛇笏の句に、「をりとりて○○○○○○○すゝきかな」というのがある。さて、中の7文字には、1「ばらりとかるき」、2「ばらりとおもき」、3「はらりとかるき」、4「はらりとおもき」の4つのうちの、どれがあてはまるだろうか。

もっとも自然なのは、3「はらりとかるき」だろう。しかし、蛇笏が書いたのは、4の「はらりとおもき」である。「はらりと」と「かるき」の組み合わせの自然さにくらべて、「はらりと」と「おもき」の組み合わせは不自然で、違和感がある。その違和感を読み手に突きつけることによって、読み手は、ススキそのものに、ようやく出会うことになるのだ。詩人の大岡信は、この句の鑑賞の中で、「「はらりと」とあれば軽さを反射的に思うのが普通だが、それが「おもき」と続く時、すすき一本の霊妙な重みに、にわかに目を開かれる思いがする。」と書いている（『続折々のうた』岩波新書、1981年）。

すすきの句だけれど、それだけではなくて、日常の中で見過ごしてきた、さまざまなものに気づくきっかけを与えてくれる。文学は、何らかの違和感を与えることによって、オートマチックに生きている私たちの毎日にストップをかける。そして、私たちは、はじめて「考える」ということをはじめる。

「奥行き」の形成

夢中になって本を読んでいて、ハッと我に返るという体験をしたことがあるだろう。読んでいるあいだは、日常を生きている自分ではない自分に



なっていたわけだ。このように、「我ならぬ我」を体験したとき、つまり、本を読むことで、「もうひとつの世界」を手に入れたとき、私たちは、現実世界から解放される。

日常の中で、ただぼんやりと生きていくのではなくて、もう少し遠近感と言うか、自分の中に「奥行き」がほしい。そういう「奥行き」を手に入れる時期が、中学生や高校生の時代なのではないか。文学だけではなく、歴史を読むのでも、科学的なものを読むのでも、世界の情勢について書いたものを読むのでもいい。現実と接している自分ではない自分が感じられたとき、私たちは、未知の世界に入り、未知なる知見を得ることができる。

自分をささえる呪文

本を読むことが大切だと考える、二つめの理由は、ことばによって、あるいは物語によって、自分がささえられることがあるから、ということ。

私は、いやなことがあると、「たよりになるのは／くらかけつづきの雪ばかり」とつぶやく。すると、安心する。これは、宮沢賢治の「くらかけ山の雪」という短い詩の冒頭の一節だ。私にとっては、ほとんど呪文のようなものになっているのだが、唱えていると自分がささえられる。落ち着く。一つのフレーズでもいいし、一まとまりの物語でもいい。ことばによって、ささえられるということがあるのではないか。

もちろん、そうした「ささえ」をさがすために本を読むというのはおかしいのだが、たまたま、本の中に、そういうことばが見つかって、それによって自分がささえられる、ということは、ある

にちがいない。特に、子どもたちには、詩を読んでもほしい。中学生・高校生には、谷川俊太郎、長田弘、辻征夫などの詩集、ちょっとむずかしいかもしれないが、荒川洋治の詩集などをすすめたい。自分をささえてくれる、ことばに出会えるかもしれない。

論 理性

本を読む意味の三つめは、本を読むことによって論理性が育つということ。

絵や写真、映像は、空間的にパッととらえられるが、ことばというのは、ある一瞬には、一つのことしか言えない。そして次の瞬間にまた一つのことを言い、さらに次の瞬間にまた一つのことを言い……と順々に重ねていって、結果的にある構成を持った文章なり話ができあがるわけで、これが「論理」だと思う。

文字を順々に追いながら、自分の頭の中に「ある像」、「ある世界」を立ちあげていく。

順序立ててものが書ける、話ができる、意見が言える、ということは、子どもたちにとって絶対に必要なことだ。こうした「論理性」は、言葉を連ねて書かれたものを読むことによって育つ。もちろん本をまったく読まなくても、ものを書いたり話をしたりすることはできるかもしれないけれど、「論理性」という点では、やはり弱いだろう。

読 むよるこび、書く楽しさ

自己解放のきっかけ、自分をささえる呪文になる、論理性の獲得、読書の意味を数えあげてきた



作品の数だけ子どもたちの感動が——
是非取り組んでみてください

けれども、これらは、私たちにとって、何より深いよるこびであるにちがいない。

さて、子どもたちが読むことを楽しんだら、それを自分だけのよるこびにするのではなくて、だれかに、親しい友だちにでも、家族にでも話してしまうといいと思う。教育学者の齋藤孝さんは、『読書力』（岩波新書、2002年）という著書で、本を読んだら人に話すと、本の記憶が自分の中で定着するといっているけれど、必ずしもそういうことではない。だれかに話すことによって、自分にとっての、その本の意味がよりはっきりすると思う。

そして、自分にとっての、その本の意味を書いてみたら、もっとよいだろう。ただ、自分の内側にあることを文章にあらわすのは、やはり、なかなか、むずかしいところがある。大人たちが、子どもが本を楽しんで読んだ経験を共感をもって聞き、子どもの中から、ことばを引き出してやりたいものだ。

プロフィール

宮川 健郎 (MIYAKAWA TAKEO)

1955年生まれ。明星大学人文学部教授。専攻は日本児童文学。立教大学卒業。宮城教育大学助教授を経て現職。主な著書に『国語教育と現代児童文学のあいだ』（日本書籍）『宮沢賢治、めまいの練習帳』（久山社）『児童文学 新しい潮流』（双文社）『世界の名作どうわ 学年別・新おはなし文庫』（偕成社）『現代児童文学の語るもの』（NHKブックス）『本をとおして子どもとつき合う』（日本標準）などがある。（社）全国学習塾協会主催全国読書作文コンクール選考委員。